

# 若手呼び込み医師増加

## 県立東金病院 研修充実や休日確保

新人医師が自由に研修病院を選べる新医師臨床研修制度が始まって3年。地方の医師不足が叫ばれる中、東金市の県立東金病院は、専門医の資格を取得できる研修を充実させるなどの取り組みを通じ、昨年9月には2人にまで減った内科医を4月から6人に増やした。平井愛山院長(58)は「真IIは、「いま病院の顧客は若手医師。病院に育てる熱意がなければ5年先はない」と話し、02年の内科医12人時代の復活に自信をみせる。

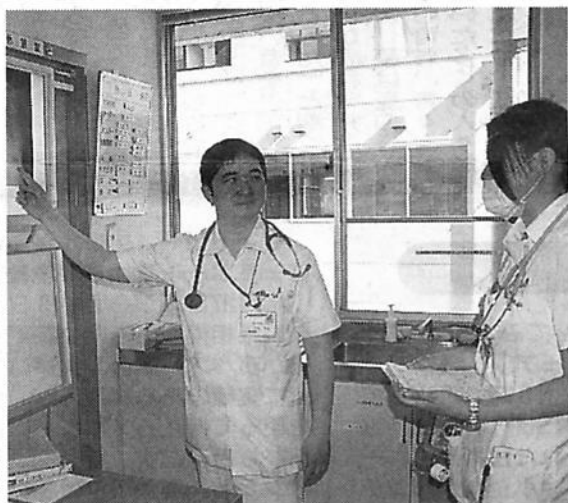
(吉井亨)

平井院長によると、新  
研修制度のおおりに受



け、内科の医師はいったんは減り続け、昨年9月は院長自身が深夜11時まで診療にあたることも。しかし、数年間研修すると内分泌代謝内科専門医などを受験、資格取得で

きるような態勢をそれまで整えてきたことが、事態を大きく変えた。最近の若手医師は、学位(博士号)取得より専門医・認定医取得を重視する傾向があるという、



取り組みを知った東北大や新潟大など各地の医学部を出た30代の医師たちが集まってきたのだ。患者が集中して医師が

疲れ切ってしまう現状を変え工夫を取り入れたことも功を奏した。例えば、地域の診療所と連携を強めて患者を逆

古垣音広医師。「若手医師がキャリアをつくる場にした」と話す。東金市の県立東金病院で

医師に患者とのコミュニケーションの取り方などについて助言する。

鹿兒島出身の古垣音広医師(34)は、鹿兒島大学卒業後、奄美大島で診療所長をしていた。福岡市で開かれた学会で東金病院の取り組みを知り、家族4人で千葉県に来

た。「7、8割が(出身の)大学病院に行っていた時代から、ルールが用意されない時代が変わった。博士号より専門医取得はありがたい」

入院患者の容体確認などで病院に顔を出すことが多いが、月3回はおお

むね週休2日が取れるようになったという。医療事故などへの医師の説明責任がますます求められる時代。「当直明けに休養を取れること」は医師にとっては、「リスク管理」になる。

今後、内科医が12人以上の態勢になれば当直明けの休養が可能になり、そのことでさらに若手医師が集まるといふ好循環が期待される。

平井院長は、「これまで大学病院におんぶにだっこだった。どんな医師をどう育てるか病院が問われる」と話している。